

こごみ日和66

特集：布を知り、布との付き合いを楽しんで
『布フェス in 京都 ～布ってこんなにOOだ!～』レポート
ごみ減量会員さん訪問記「ごみ減の会員さんってどんな方?」:

宝酒造株式会社さん

グリーンキーパーがゆく：農業体験学習を通じて次世代の教育者を育成
京都教育大学 環境教育実践センター 南山泰宏 先生

なごみ日和：ドッジボール日本代表

KBS 京都 アナウンサー 海平 和

京都市ごみ減量推進会議 HISTORY :

ごみはみんなの問題。

市民・事業者・行政が手を携えて立ち上げ

地域活動レポート：“要らないもの”を“欲しいもの”に。

子ども服の交換会

～修学院第二地域ごみ減量推進会議～



布ってこんなに...

布をリサイクル、リユース
することがエコなんだ!

あたたかい

思い出

大切

魔法の素材

アート

ワクワクだ!

おもしろい

宝の山

便利

無駄が多いなあ

ごみになっていると
かわいそう...

素敵

ふしぎ 資源

四角い布でも
いろいろ使える

楽しい!!

自由自在!
使い方無限!

人生

生涯の友、やすらぎ、
創造、夢

ナゾだ!
いい意味で。

生活に
必要なもの

すごい!

布の質に
注目したいです。

宝物

ごみにまつわるこの数字なあに?

1990年と比べて約2倍に

答えはWebへ!

※トップページ「よもやま話 ごみ減のごみ袋」
をご覧ください。

写真 藤田一美

「こごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、
京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。
最新号・バックナンバーもウェブで公開中! <http://kyoto-gomigen.jp/>



手をとりあって ごみを減らそう!
京都市ごみ減量推進会議

Q ごみ減 検索

特集

布を知り、 布との付き合いを楽しんで 『布フェスin京都 ～布ってこんなに○○だ!～』 レポート



みんなでつないだふろしき (ふろしきでガーデンラッピング)

楽しみながら布に触れ、身近な布(繊維)の特性や新たな可能性、布のライフサイクルなどを知って、布とのつきあい方を見直し、大切に使う工夫や知恵について考えるにきっかけにしてもらおうと、3R推進月間イベント「布フェス in 京都～布ってこんなに○○だ～」が10月25日、京エコロジーセンターで開催されました(主催:京都市ごみ減量推進会議、京エコロジーセンター)。当日は秋晴れの行楽日和、「初めて来館した!」という声もきこえる894人の来場者でにぎわいました。

いつものエコセんじゃない!

京エコロジーセンターが、この日はさながらハロウィンのパーティー会場。建物は外側にまで、布をつなぎ合わせて作った飾りがかけられ、吹き抜けのロビーには青白チェックの布の天井、階段や二階の手すりにもきらびやかな飾りがかけられて、布の魔法がかかったお城に。そして入口にどんと積み上げられた1トンもの古着。この日のテーマの象徴です。

ロビーでは、クイズ形式で楽しめるアトラクション「服も分ければ資源、混ぜればゴミ」(株kurokawa)や「きもの・Re:makeファッション☆ショー」(神戸女子大学)も開かれて、大学生のお姉さんのリードで子どもモデルも

出演。染め直し、仕立て直しができる着物を見直し、またステキな洋服に生まれかわるリメイクの魔法にも気づかされました。



きもの・Re:makeファッション☆ショーを終えて

布製品の3Rを変えようと 42の団体・事業者が参加

このイベントは昨年開催した「紙フェス」の成功を受け、2015年のテーマについて検討し、回収等の仕組みがあるものの、まだまだ課題が残る古着類、つまり布をテーマに開催されました。

全国的に見ても、衣料品のリサイクル率は11.3%、リユース率13.4%、リペア*率1.6%、合わせた3R率でも

26.3%(平成23年「繊維製品3Rシステム検討報告書」経済産業省)と、古紙、ビン・カン、ペットボトルに比べて3Rが進んでいない状況にあります。

今回は一般社団法人日本繊維機械学会(以下、繊維機械学会)の監修・協力を得たことから、繊維メーカーや大学等、京都市内外の42の団体や企業、当会議会員事業者が参加。当日は、13の体験プログラムと16の展示や実演が、京エコロジーセンター全館を使って行われました。

*リペア 所有者の手を離れず本来の製品とはかたちを変えて利用されていること。

縦糸は布のライフサイクル

今回は布のライフサイクル(原料から、捨てられた後リサイクルされるまで)についての展示や実演がありました。その内容をふりかえってみましょう(以下、出展者名を記載していないものは繊維機械学会出展)。

「Tシャツ1枚作るには?服の原料を知ろう!」では、綿、羊毛、絹、ポリエステルそれぞれを原料に作られたTシャツと、それを作るのに必要な量の原料をセットで展示。その原料がどれくらいの時間をかけて育っているかも表示されていました。「綿・羊毛の糸紡(つむ)ぎ体験」では、



糸になってきたよ!

コマのような道具を回すことでふわふわの綿が細い糸として巻き取られていく作業に子どもたちが挑戦。服がどこでつくられたのかを学ぶ「みんなの服はどこから来たのかな?」(京エコロジーセンター)では、自分が着ている服のことを改めて考えました。「プロに聞こう!しみ抜きや衣服の長持ちのコツ!」(クリーンショップおくむら)ではプロの技術で醤油のしみを手品のようにならびつくり。使い終わった布を裂いてつくる「布ぞうりの実演」(愛・編む布ぞうり)や、「板締め染めで、あい色オリジナルハンカチをつくろう」では、藍染め液から取り出したときに黄色だったハンカチが一瞬にしてあい色に変色。布との付き合い方が楽しくなってきます。

横糸は布の歴史と未来へ

「繭(まゆ)の糸繰り体験」は京都の絹織物の原料となる生糸を昔ながらの道具を使い、手作業で繭からほどいて巻き取っていくもの。おむつなし育児研究所 京都サロン(「こごみ日和」64号で紹介)も「浴衣から輪おむつをつくろう」ワークショップで、伝統的な布おむつの利用を呼びかけていました。

「包んで結んで、ふろしき遊びしよう!」(ふろしき研究会)は伝統的なふろしきが、本やノート、びんなどを包み、現代の生活でも十分に使えることを教えてくださいました。「『中庭で風を包もう』ふろしきでガーデンラッピング」(同)では、当イベント総合プロデューサー水野哲雄さんの指揮のもと、色とりどりのふろしきが結び付けられて3階中庭にそよぎ、青空のもとで美しい風景をつくりだしていました。

「機能性繊維コーナー“服地で健康診断!?”」は、服に装着した電子機器によって自分で健康管理ができる機能服、「3R

「古着って捨てた後はどうなるの?」(株山本清掃/京丹波ウエス)は、集められた古着が100種類に分別され、古着販売用、海外輸用、ウエス(工場



プロのしみ抜きを間近で

で機械油等をふき取るのに使う布)用などに仕分けされる様子を写真で展示。車や建築用の断熱材に使われている反毛(はんもう:繊維をほどいて綿状にしたもの)の現物を展示した「FURUGIのカチ」(株kurokawa)、使い終わったブラジャーを店頭回収してRPF(廃棄物固形燃料)にする「ブラ・リサイクル」(株ワコール)の取組など、捨てられた後のリサイクルについての展示もありました。

デニムの繊維をほぐして漉いた「Gパンで手すきハガキをつくろう」や、幼児から大人まで楽しめる「ハギレでつくるかんたん工作」(あとりえ・ちょぼ、京都市ごみ減量めぐるくん推進友の会、コニシ株)など、捨てる前に自分



ハギレを使ったシュシュづくりに夢中

でもリサイクルを楽しめるアイデアいっぱいの体験は、大人気でした。

を目指した繊維製品展示“廃材からこんなものが!”は、繊維廃材をデザインしてつくられたマグネットバーや野菜くずで作られたシートなど、布製品の近未来が展示されていました。(こごみ日和65号でも紹介)

将来世代への働きかけとしては、「体操服のリサイクル。さあ、明日から始めてみよう!」(体操服「行ってらっしゃい、お帰りなさいプロジェクト」)のトークショー。子どもたちの声からうまれた、「体操服を体操服にリサイクルする」プロジェクトも、現在では京都市内約100校で取り組まれています。「服で伝えよう」(旬村田堂)も、着物の布や帯を巻いてつくった京独楽(こま)や学生服を使った服育を通じて、子どもたちに社会や環境との関わり方を伝えていました。

当日のアンケートには、「楽しかった」「使い方は無限」「布は魔法の素材だ!」とともに「服を大切に着る」「捨てる前のひと工夫を考える」「布って究極のエコだ!」などの感想がありました。今回出展した団体・企業の取組や、つながりが発展し、さらに、子どもたちとも力を合わせて繊維製品の3Rが進められるといいですね。

山田 岳 (平成27年10月25日取材)



田んぼ体験あり、4Rあり 充実した環境活動

～基本は自然と人とのいい関係づくり～


宝酒造 株式会社

収穫されたもち米を原料にした本みりん。子どもたちが
手づくりしたオリジナルラベルで届けられる。

ISO14001の推進、環境関連の法整備、ゼロエミッション、CSRなど、企業の環境活動は、近年、さらに充実している。

今回訪ねたのは、自然を大切に、自然と人との良い関係づくりという理念を掲げ、果敢に環境活動に取り組む、宝酒造。紙面では書ききれないほどの幅広い活動を、凝縮して紹介する。

苗を植え、稲を育て、調理する 体験して学ぶ、子どもたち

取材の当日、オフィスの一室に通されると、まず手渡されたのは、「田んぼの学校」と題するパンフレット。中を開くと、春は田植え、夏は草取り、秋は鎌を手に稲を収穫、冬は調理や食事の風景、といった写真が並んでいる。主役はいずれも子どもたちだ。宝酒造と聞いて、思い浮かべるのは「松竹梅」「タカラcanチューハイ」など、酒類の銘柄。なぜ子どもたちにこんな事を？取材に


田植えに励む子ども

した。

南丹市の一角、1.2反ほどの土地では、子どもたちの参加を募り、田植えから収穫までが行われている。さらに育てたお米を使っての料理教室も開かれ、一年を通じた体験型の環境教育が実施されている。栽培するのは、もち米。収穫後、みりんづくりに活用し、翌春、特製本みりんとして子どもたちのもとへ届くしくみだ。2015年は、80名の参加があった。

田植えから本みりんまで。この間、子どもたちは、豊かな自然の中で、自らの力で生き物を育てるよこびを得るにちがいない。ここから自然を大切にする心が醸成される。大阪府、兵庫県など、京都だけでなく、遠方からの参加も多く、「一生懸命に取り組む姿に、感銘を受ける」と、中尾課長はやりがいを噛みしめながら語る。宝酒造の社名の「宝」は、実のところ「田から」が語源。自然の豊かさや、恩恵、そして命の循環を学ぶ場となっているのだ。

取組が広がる「エコの学校」 協働による運営が基本

「田んぼの学校」の立ち上げは2004年。宝酒造一社だけでなく、京都府の後援を得て、地元農家、ボランティア参加する大学生、NPO、料理学校、加えて看板や幟の制作を手がける授産施設の方々との連携で行われている。環境活動の鍵となる「協働」による運営が継続の一要因かもしれない。

環境教育として2012年より、ごみ問題にも取り組み、夏休み期間の8月に小学3～6年生を対象に「エコの学校」を開いている。この事業の運営においても、行政をはじめ「協働」を基本としている。

「エコの学校」では、4Rなど、ごみ減量について学び、お酒のアルミ付紙パックを用いた紙漉き体験をして、その後自分で漉いた紙で、絵はがきを作るカリキュラムを実施。当初は、京都だけであったが、神戸、東京都・江東区にも拡大しているという。2015年は6教室、144名が参加した。



紙漉きをする子ども。
漉いた紙ははがきに

環境活動歴は36年 自然保護への熱い思いから

1979年、日本では「琵琶湖の富栄養化の防止に関する条例」が制定されるなど、大気汚染、水質汚染が主な環境問題として世を騒がせていた。宝酒造はこの年に、環境活動をスタートさせた。

北海道・札幌市を貫流する豊平川。かつて毎年、遡上していたサケの姿が、水質汚染により消えていた。この川をきれいにし「サケを呼び戻そう」という市民運動に、宝酒造は共感、北海道限定の宝焼酎「純」を記念ボトルで販売し、売上金の一部1000万円を寄付するなどの「カムバック・サーモン・キャンペーン」を展開。その後、川は浄化され、放流したサケも遡上し、自然保護活動の伝説となった。

自然を大切にという精神は、6年後の1985年に設立された、公益信託「タカラ・ハーモニストファンズ」にも反映されている。創立60周年を機に立ち上げられた助成事業は、森林、動植物、海洋などの保護活動の実践、および研究をすすめる団体

や個人に手を差し伸べるもの。毎年、公募が行われ、これまで多数の応募の中から延べ322件が選ばれ、助成金総額は約1億5500万円となった(2015年実績)。一例を紹介しよう。2013年は、『宝島の海とあゆむ大学生プロジェクト』が採択され、鹿児島県トカラ列島「宝島」沿岸地域における海外からの漂着ごみ調査が行われた。大学生と地元の農家さんとの協働での実態調査、翌年には、宝島の子もたちを対象にした環境教育がなされ、また、大学生は島での暮らしを体験した。



“サケを呼び戻そう”という市民運動を支援した宝焼酎「純」のポスター

4Rに根ざした容器の数々 環境に消費者にやさしい

酒、焼酎、みりんは液体のため、容器と一体となって商品化される。環境活動を積極的に行う宝酒造は、当然のことながら容器も配慮を重ねている。考え方の基本は4R。リデュース、リユース、リサイクルに加え、リフューズ(Refuse:発生回避)を掲げての展開だ。

まず、現代では当たり前になっている缶飲料のステイオンタブ。それまでは開けると飲み口から外れ、捨てられていた引き金を外れないよう、しかも飲む行為を妨げないように設計したタブ



日本初のステイオンタブを採用

を日本で初めて採用。ポイ捨て防止、資源の節約に貢献する画期的な取組となった。1989年、今から26年前のことだ。もちろん、容器の軽量化も行っている。焼酎「純」720ミリリットル瓶の軽

量化をはじめ、「有機本みりん」は、従来の3割の超軽量化を実現。把手付焼酎4リットルPETボトルは165グラム(1994年)を134グラム(2002年)にまで抑えた。

容器の課題となっているリユース。代表的なりターナブルびんである一升びんが著しく減少する中で、主力商品である宝焼酎「純」720ミリリットルびんをそれまでのワンウェイびんからリターナブルびんに変更し、成果を上げている。

PETボトル入りの「本みりん」「料理用清酒」についても分別作業の容易性に配慮し、はずせるキャップやパウチバックを採用している。

手軽さから普及しているアルミ付紙パックについては、酒造メーカーが一丸となり取り組む「循環型リサイクルシステム」に参加し、製造工程で発生する損紙の回収と活用に努めている。

未来を見据えた環境活動に期待

宝酒造の環境への目線は全方位ともいえる。例えば、環境にやさしい交通システムと動く広告が一つになった乗り物、ベロタクシーへの協賛をはじめ、製造に使われてきた重油ボイラーのガスへの転換、焼酎かすの活用、焼酎のはかり売りの推進、モーダルシフト(環境負荷の低い輸送への切替)と実に多彩だ。

しかし、環境活動に終わりはない。温暖化が足早に進む現代、人口、食糧、水など、地球上には問題が渦巻いている。これま

でいち早く積極的な環境活動を繰り広げてきた宝酒造。確かな品質で培ってきた信頼をバネに、未来の動きを見据えた果敢な活動による社会貢献に期待したい。



取材に応じてくださった中尾雅幸課長

「宝酒造株式会社」

〒600-8688 京都市下京区四条通烏丸東入 電話 075-241-5186

URL : <http://www.takarashuzo.co.jp>

森田知都子(平成27年11月4日取材)

農業体験学習を通じて次世代の教育者を育成 ～南山泰宏先生のチャレンジ～

京都市伏見区の住宅街を歩いていると、突然現れる森林。耳をすませば、小鳥のさえずりも聞こえてきます。そこはまさに「知の森」。今回は農業体験学習を通じた次世代の教育者育成に挑戦しておられる京都教育大学環境教育実践センター教授の南山泰宏先生に、同センターの先進的取組や地域と連携した環境教育についてお話を伺いました。



小鳥のさえずりが聞こえるセンター内の森林

農業とは本来、環境によくないこと？

環境教育実践センターには、栽培学習園や温室、有機物リサイクル装置など、種まき・苗植えから収穫、そしてリサイクルに至るまで食の循環を考えた施設が完備されています。農業は本来、自然を開拓し、そこに必ずしも地球環境にはよいとは限らない肥料をまいて食料生産を行います。収益性のみを追求し続けていると、いつか地球環境はダメになってしまいます。従って、環境負荷の小さい農業が不可欠で、同センターでは、持続可能な農業の大切さを学び、小・中学校や農業高校などで将来教鞭を取る教育者の育成を行っています。

たったの48時間で生ごみをたい肥化！！

同センター内には、「環境教育有機物リサイクルシステム」という設備があります。この設備は学生寮の食堂から生じる生ごみをはじめ、栽培した植物の残渣、除去した雑草、剪定した枝を粉碎したものなどの有機物を発酵させて、48時間でたい肥化するものです。さらにこれをペレット状にすることもできます。毎日70 kgほどの生ごみなどを投入して、できたい肥は同センター内の栽培学習園に戻されます。一般に販売もされているそうです！



環境教育有機物リサイクルシステム

京都教育大学 環境教育実践センター
環境教育に関する専門的な教育研究を行い、かつ、学生等の実験実習の場としての利用、公開講座等を行い、環境教育の推進を図っている。

京都光華女子大学環境ボランティアサークルグリーンキーパー（平成27年11月9日取材）

地域に開かれた栽培学習園

公開講座「野菜や草花を栽培して育てる楽しみや不思議さ、大切さを学習する体験教室」では、主に小学生の子どもをもつ家族を対象とした園芸教室を行っています。スイートコーンやピーナツの栽培、寄せ植えなど。最近の子どもたちは土に触れる機会も少ないので、とてもよい経験になっているそうです。ただ、子どもよりも親の方が夢中になっていることも多いとか…。



栽培学習園での公開講座の様子（スイートコーンの管理）

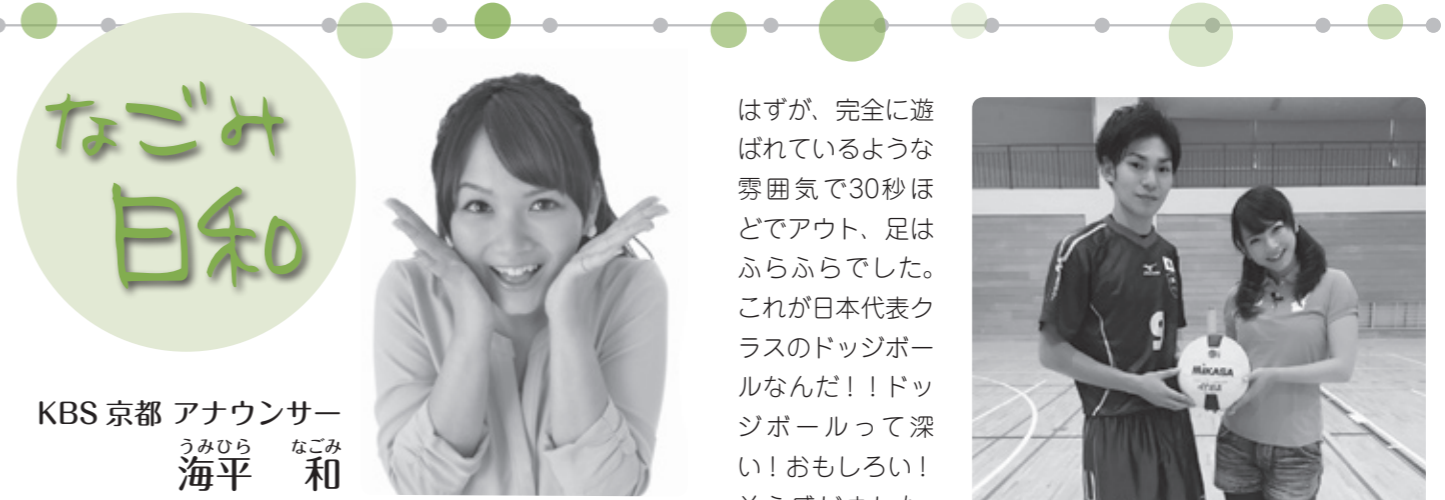
トウガラシ先生？

取材の最後に、温室の中で栽培されているトウガラシをご紹介します。関西人なら誰でも一度は食べたことのあるトウガラシ「万願寺」。トウガラシは普通、辛いイメージですが「万願寺」は辛いものとして有名です。でも、たまに辛いものもあります。

南山先生のご専門は、まさにこのトウガラシ。「万願寺」の辛味を完全に除去することに成功されたそうです！先生のトウガラシを見るまなざしは、まるで我が子を見るように優しさにあふれていました。きっと、先生の下で勉強した学生も、このトウガラシのように優しい味の先生になるんだろうな。



南山先生とその子どもたち（トウガラシ）



KBS 京都 アナウンサー
うみひら なごみ
海平 和

●● 第8回 ドッジボール日本代表 ●●

ドッジボール。きっと誰もが1度はしたことのあるスポーツだと思います。私も小学生の頃、クラスメイトとよく遊んだものです。ただし私は逃げる専門でしたが…。ちなみにドッジボールの「ドッジ」とは、「投げる」でも「受ける」でもなく「逃げる」という意味だそうです。

そんなドッジボール、遊びではなく、競技としてご覧になったことはありますか？

実はドッジボール日本代表チームには、京都の大学生がいるんです。大谷大学4年 笠松順選手。2013年の第1回アジアカップで代表入りし、見事優勝。翌年の第2回大会ではキャプテンとしてチームを引っ張り2連覇を達成しました。

パワーでむかってくる海外のチームに勝利する日本の強さは、チームワークで戦略的に戦う点。そして笠松選手の武器はボールを投げるスピードと、受けてから投げるまでの早さ。私も実際に、同じく代表選手の笠松選手のお兄さん（哲也選手）とのパス回しを体感させて頂きましたが、手加減してもらった

はずが、完全に遊ばれているような雰囲気です。30秒ほどでアウト、足はふらふらでした。これが日本代表クラスのドッジボールなんだ！！ドッジボールって深い！おもしろい！そう感じました。また、見ていてもルールがわかりやすいので応援しやすく、スピード感や迫りにドキドキ魅せられてしまうんですね。



笠松選手と一緒に

まだまだ競技としてはマイナーなドッジボール。笠松選手の目標は自分自身の活動を通して、競技人口を増やし、多くの人に知ってもらうこと。子どもたちが大好きなドッジボールをずっと続けられるように、そして将来選手としてがんばっていけるような環境を作っていくこと。大好きなドッジボールのため、自分の夢のため、これからの未来を担う子どもたちのため、笠松選手は挑戦しています。2020年の東京オリンピックでデモンストレーション競技として行いたいと語るその表情は決意に満ち、輝いていました。

海平 和：京都市出身、2010年KBS京都入社。テレビ「京スポ」、ラジオ「森谷威夫のお世話になります」などに出演中。

京都市ごみ減量推進会議 HISTORY

1

当会議は、平成28年11月に設立20周年を迎えます。

ごみはみんなの問題。市民・事業者・行政が手を携えて立ち上げ

京都市ごみ減量推進会議（以下、ごみ減）の発足は1996年（平成8年）11月。京都市のごみ量は1981年以降増加の一途で、1995年は78万トン（1967年の約2倍）に達し、ごみ処理や最終処分において課題が噴出していった。

1970年代以降の大量生産・大量消費・大量廃棄というライフスタイルの時代を経て、温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨など地球環境問題が浮上し、対策が緊急課題であった。環境基本法が制定された1993年、京都市廃棄物減量等推進審議会が発足。同審議会が1995年に提出した「京都市ごみ減量化行動計画」答申の中に、発生抑制と並び、市民、事業者、行政が互いに連携し、具体的な行動を進めるという提言が盛り込まれた。このままではいけない、ごみを集め、焼却するだけでは…。ごみそのものを減らす策を急がねば…。ごみ減量は行政だけでは実現できない。「市民・事業者・行政でのパートナーシップでこそかなうとの意向が高まり、ごみ減の立ち上げに至った」と高月絨会長。市民や事業者が排出したごみは行政が回収処理という、お決まりの仕組みの変革ともいえるユニークな組織のスタートであった。

森田知都子（平成27年11月2日取材）



“要らないもの”を“欲しいもの”に。子ども服の交換会

秋晴れに恵まれた日曜日、修学院第二小学校は朝から賑わっていました。子ども連れのお母さん、マイバッグを手にしたお母さん、服をバンバンに詰めた紙袋をいくつも持ち込むお母さんの姿もあります。

この日行われたのは、修学院第二地域ごみ減量推進会議（以下、修二ごみ減）による「リサイクル市・子ども服の交換会」。着なくなった子ども服や、使わなくなったおもちゃを持ち寄り、必要とする人が自由に持ち帰るといふ無料交換会です。



イベント告知のポスター

服と一緒に“想い”をつなぐ

会場の修学院第二小学校ふれあいサロンには、子ども服がサイズ別にずらりと並んでいます。



見やすく並べられた子ども服

朝から、修二ごみ減会員をはじめ、左京エコまちステーション、東部まち美化事務所の皆さんが集まり、準備にあたりました。畳んで台の上に並べるもの、ハンガーラックに吊るすもの、ぬいぐるみやおもちゃも種類別に見やすく陳列。会場内には、牛乳パックとストローで紙とんぼを作って遊ぶエコ工作コーナーも設置されています。

「この服は今日持ち込まれた品ではなく、事前に呼びかけ、エコまちステーションで受け取ってもらい、汚れや傷みをチェックし、選別してあります」。そう語るのは、修二ごみ減の会長を務める津幡幸道さん。「子ども服には親御さんの想いがこもっています。うちの子はもう着られないけど、誰かに着てもらいたいと思って持ってこられる服ですから、我々はその想いも合わせて繋いでいきたい。気持ちよくリユースしてもらうためには、事前の準備は欠かせません」。

大盛況！ 現代版お下がりシステム

開催時刻の少し前から、たくさんのお母さん方が集まり出し、陳列された服を手に取りながら、思い思いに見て回ります。子どもたちは、工作コーナーで紙とんぼ作りに夢中になっているので、じっくり服選びができます。気に入った品が見つかった人は、持参したバッグや袋に詰めて、笑顔で会場を後にします。こうして、ずらりと並んでいた服やおもちゃは、次々ともらわれて行きました。

参加者からは「うちの子はもう着られないけど、まだま

だ着られる服がたくさんあって、捨てるのはもったいないと思っていたので良い機会だった」「子どもは成長が早く、高い服を買ってもすぐ合わなくなる。無料で譲ったり、譲ってもらったりできるので助かる」、「フリーマーケットやママ友同士でやりとりするより、気軽に利用できていい」などの声が聞かれました。

同学区の市政協力委員連絡協議会会長で、修二ごみ減のメンバーでもある上田将さんは、「昔は兄のお下がりを着るのが当たり前で、ポロポロになるまで着た。今は少子化で、近所付き合いも希薄になり、要らない服の行き場が少ない。これは現代版のお下がりですね。古着といってもまだまだきれいだし、こうしてお互いに交換しあうことで、古着をごみにしないで再利用することができるので、ものを大切にするという環境も作れて非常に良いと思う」と感想を語ってくれました。



おもちゃのコーナーで竹馬GET

もったいない精神が息づく地域に

修二ごみ減は平成27年2月に発足。津幡会長を筆頭に、同学区の小・中学校の各校長先生や、前出の市政協力委員連絡協議会会長、下鴨少年補導委員会会長、修二美しくする会会長など、地域活動のリーダーたちが役員に名を連ねており、学校と地域が連携・協力して環境活動に取り組む体制が整っています。「今回のリサイクル市も、学校や児童館でポスター・チラシを見て来てくれた人がたくさんいました。広報誌や回覧板では行き渡りにくいごみやリサイクルに関する情報も、学校や関連機関を通して広く情報発信していきたい」と言う津幡さん。「今回のイベントを通して、子ども服は資源だと改めて感じました。自分に要らないものでも、誰かには欲しいものです。こういうイベントが、ごみの減量や不用品再利用の推進になると思うので、定期的に開催して“もったいない”の心を地域に根付かせていきたい」と抱負を語ってくれました。



後列左 修学院第二地域ごみ減量推進会議 会長 津幡幸道さん
後列 修学院第二小学校 校長 天野克彦さん
前列左 左京エコまちステーション 大村充さん
東部まち美化事務所 作業員 森川善孝さん

藤原幸子（平成27年11月1日取材）